The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Immortality and Death : John Keats and the Tradition of the English Ode
Author(s)	Murai, Miyoko
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3143704
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【4】

氏　　名	村　井　美代子（むらい　みよこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　13590　号
学位授与年月日	平成10年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科英文学専攻
学　位　論　文　名	Immortality and Death : John Keats and the Tradition of the English Ode
論文審査委員	（主査） 教　授　藤井　治彦 （副査） 教　授　石田　　久　　助教授　玉井　　暲　　助教授　森岡　裕一

論文内容の要旨

本論文はイギリスの詩におけるオードの伝統を記述し，その伝統がどのような形で継承されているかという視点からキーツのオードの解釈を試みたものである。論文は英文で書かれ，289ページからなる。

第1章は16，17世紀のオードの特色を論じる。イギリスのオードは16世紀に古典古代のオードの内容を模倣した詩を作ることによって始まった。ベン・ジョンソン，ヘリック，ミルトン，カウリー，ドライデンなどの詩人は主として国家的な行事やある人物の誕生や死，凱旋などに際して，対象となる人物の栄誉と偉業をたたえ，その名に永遠性を与えるためのオードを創作した。

第2章は18世紀のオードに生じたテーマの変化を論じる。この時代に至り，オードは人生のはかなさや死の意識をテーマとするようになる。このテーマは古典古代においてはホラティウスのオードに見出されるが，この時代のイギリスのオードで特に顕著に見られるようになった。グレイやコリンズは人間の名声の不滅を称えるためにではなく，人の死を嘆き，すべての避けられない運命である死を瞑想するオードを書いた。言い換えれば，オードは公的な性質を失い，個人的な感情を吐露する場となったのである。

第3章はロマン派の詩人のオードを論じる。彼等は一度は姿を消していた永遠性のテーマを復活させた。しかし，それは外在するものの永遠性ではなく，彼等の内面に存在するものの永遠性であった。ワーズワースはその内面の永遠性を切望し，コールリッジはその永遠性のヴィジョンを見る想像力の枯渇を嘆いた。

第4章から第7章まではキーツのオードを扱う。第4章では彼の初期のオードと『サイキに寄せるオード』を論じ，これらの作品が伝統的な永遠性のテーマを継承していることを示した。『サイキに寄せるオード』ではサイキは神となって，永遠の世界でエロスとの不滅の愛を楽しむことが語られている。

第5章は『ナイチンゲールに寄せるオード』を論じる。この詩で，ナイチンゲールはその美しい声で詩人を永遠性を暗示するヴィジョンの世界に誘うが，そのヴィジョンの中には死が暗示されている。論者はナイチンゲールという鳥がヨーロッパでは死を知らせる鳥と考えられていたことを述べて，この死の暗示はその連想と関連すると論じている。

第6章は『ギリシアの壺に寄せるオード』を取り上げ，このオードにおいても，幸福な永遠の世界の中に死が現われることを論じた。しかしながら，このオードにおいては，壺が見る者によって繰り返し鑑賞されるべきものであることが暗示されており，論者はその鑑賞の循環性が新しい永遠性を示唆していると考える。

第7章は『メランコリーに寄せるオード』と『秋に寄せる』を論じ，これらの詩は永遠性と死の対立の解消を目指していると論じる。『メランコリーに寄せるオード』では詩人ははかない美を味わい尽くすことによって死と和解しようとするが，その解決は完全なものではない。『秋に寄せる』では，詩人は秋の豊饒と来たるべき衰退と死を対比しつつ，その両者を包括する不滅の循環性を自然の中に見て，永遠性と死の和解のヴィジョンを描いている。論者はキーツのオードはイギリスのオードの伝統的な二つのテーマである永遠性と死を受け継ぎ，最終的には両者の調和を達成するものであったと結論する。

論文審査の結果の要旨

オードは英詩の重要な部分を占めるジャンルであり，その数も多く，しばしば難解であり，その全体を把握するのは困難である。論者は16世紀以来のオードの代表作の検討を通じて，その伝統の特色を永遠性と死というテーマに整理して捉えることに成功した。これは本論文の大きな功績である。その過程において，論者はポープのオードに初期ロマン派のオードと共通する特色を見出し，コリンズのオードの抒情性の意義を指摘し，コールリッジとシェリーの嵐の象徴性に両者に共通の意味を発見するなど興味深い記述を行なっている。キーツのオードは英文学のうちでも最も研究の進んだ分野であるが，論者は先行する膨大な研究をよく検討し，また個々の詩については，ほとんど一語一語の意味を考量して，精緻な分析を加え，独自の解釈に到達している。その上でキーツのオードがイギリスのオードに伝統的な二つのテーマを継承し，その融合に到達しているという結論を示したことは，キーツ研究に重要な見解を提出したと言えるであろう。

ただし，本論文に改善すべき点がないわけではない。余りに詩のテキストに即して論じるために，論文の構成が見えにくくなり，平板な印象を与えるおそれがあること，記述に繰り返しが感じられること，先行する研究への評価にときに明快さが欠けることなどは惜しむべき点である。しかし，これらは本論文の本質的な価値を損なうものではない。

以上の結果に基づき，本審査委員会は本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。